

## 藤森朋夫君と私

佐 伯 梅 友

藤森朋夫君と知りあったのはいつからであろうか。いま、はっきりした記憶がない。東京高等師範では私の方が前で、私は三年めから寄宿舎を出ていたから、そういう面で知りあう機会はなかったであろう。国漢会というのがあって、新入生の歓迎会と卒業生の送別会とをやっていたから、そういう席で顔をあわせたことはあったに違いないが、その記憶もないのである。してみると、万葉三水会が結成されてからということになりそうである。

三水会は文字どおり藤森君によって運営されていた。定例を第三水曜日としてはいたが、それを忘れさせないために、また今度の研究発表者と題目とを知らせるために、毎回通知が出されたが、それはいつも藤森君の手で行なわれた。記録もまた藤森君によって行なわれ、保管されていた。「万葉集研究年報」の編纂と刊行とも同様で、われわれは割り当てられた書籍と雑誌とについて原稿を作るだけで、それ以外はほとんど藤森君の手を待ったといってもよいくらいであった。

京都から私が東京に移ったのは昭和十七年六月で、月一回学生会館によりあつてお互いの無事を確かめあう、三水会の例会は、ほんとうにうれしいものであった。終戦後のしばらくがどんなぐあいであったか、思い出せない。本郷の学生会館ができてからは、そこでまた例会が行なわれたが、出席者が、藤森、石井、佐伯の三人と決まってしまつて、さていつまで続いたのかもおぼえがない。朝日新聞の講堂を借りて二十五周年だったかの記念講演会をしたり、地方へ出かけようというわけで奈良学芸大学で三水会の講演会をしたりというときは、森本・遠藤の両君も参加されたが、例会は三人と決まってしまつた。

日本古典全書の万葉集を引き受けたときは、藤森君のきもいりで、東京女子大関係の箱根の寮に三人集まつて、分担やら注のつけ方の打ち合わせをしたのであつたが、これも思い出の一つである。その万葉集の第一冊の初版が、昭

和二十二年十二月とあるのでみると、それは二十一年の夏ごろであつたらうか。

藤森君の大東文化大学への出講はいつからのことであつたらうか。昭和三十五年は、大東文化が文学部を独立させる準備のために、谷鼎教授と藤森君とで、教員集めの相談を始めていたらしい。藤森君は大東文化は非常勤ではあつたが、教授待遇で、教授会にも出席していたわけである。その昭和三十五年七月に交通事故で谷教授がなくなつたので、あとは藤森君が一人で日本文学科の責任をもたれた形になつた。とりあえず私がその欠けた時間の手伝いを頼まれたのであるが、藤森君の人集めの苦勞は、話を聞くだけであつた。

昭和三十六年四月から私も大東文化専任となり、家には佐伯古文研究所という看板をかかげて、古文研究というガリ版の小冊子を作り始めたが、そのころ藤森君は茂吉研究という同じくガリ版の小冊子を始め、三水会の席上それをもらつたり、その反響を楽しそうに聞かせてくれたものであつた。古文研究も五号になるかならずでストップしてしまつたが、茂吉研究も同様であつた。私のほうは怠けからであるが、藤森君のほうは、高血圧で悩まれて、遂に学校も休んで静養ということになつた結果だと思ふ。東京女子大へ一コマ私が手伝いに一年間通つたおぼえがある。

再び出講されたときは、多分東京女子大は停年で、大東文化専任ということだつたと思ふ。だいぶ気が弱くなられて、諸本を調べあわせて講義の準備をする気力がなくなつたといつて、大学院の時間を持つてくれと頼んでも、とうとう引き受けてもらえなかつた。顔を合わせる日が週に一日あつて、その日はいっしょに帰り、池袋の東武百貨店の地下（当時はそこが食堂であつた）でしばらく休憩、雑談して別れるのが例で、お互いにそれが一つの楽しみであつた。

再び病床に就かれるようになって、昭和四十二年の五月だつたか、学校からのいろいろな届け物を持つてお宅にあつたのが最後で、昭和四十四年八月二十九日になくなられるまで御無沙汰が続けてしまつたことは、何と責められなくても言いわけのできないことであり、まことに相済まぬこととして、君のあとを追うまでは私の心に残ることとなるであらう。